

『墓掃除』

かぶらのたいたん

1,525 文字

あらすじ

年に一度の墓掃除。

墓石から玉砂利まで、苔一つ残さずきれいに掃除する。

雲一つない空はどこまでも青く、太陽は休まることを知らない。

今年もこの日がやって来た。年に一度の墓掃除。

以前は娘夫婦も一緒に掃除していたのだが、彼女達が足を痛めてからは一人でやっている。

去年あんなに磨き上げたのに、墓石はもう砂埃にまみれて白くなり、地面近くは苔むしていた。

花立てには娘が供えたヒマワリ。好みに合わせる心遣いに、良い娘をもったと誇らしい。

当初はみずみずしかったのだが、この炎天下の中ですっかり水気が飛んでしまった。花立てから引き抜き、口を開けておいていたゴミ袋へ。

物置台の、花立てに備えきれなかった花や干菓子のようになったまんじゅうもまとめて捨てる。

お次は雑草。毎年引き抜かれる運命にあるというのに、懲りずに石畳の隙間を縫って生命力の強さを主張している。軍手をはめて、生い茂る雑草を…ああ、そういえば近所の悪ガキがここで花火をしていたっけか。これもゴミ袋行だ。

一通りむしり終えた後は、目についていた苔にとりかかる。

墓石や物置台は勿論、墓誌や灯籠の苔も歯ブラシでこすり取る。ついでに大きな汚れも。たわしを使えば早いと思っていたのだが、それでは石を傷めてしまうらしい。

表から見える部分だけでなく、ぐるりと一周してくまなく苔を探す。よしよし、全てこそげ落としたな。

ここまでずっと屈みっぱなし。立ち上がり、腰をさすって首をもむ。始める前の状態と比べれば随分と綺麗になったのだが、これだけでは終わらない。

一番の重労働、石磨きだ。

はめていた軍手を水で濡らしてそのまま磨く。なかなかどうして、これがまた汚れをよく落とす。

物置台や墓誌は四角形のため、比較的磨きやすく短時間で終わる。問題は墓石と灯籠。石が重ねられており、一思いにやりにくい。

先に墓石か。てっぺんから順にごしごしとやる。小さい頃は墓石の頂点に手が届かなかったものだが、気づけば見下ろしているではないか。感慨深いものだ。

水鉢の中もこすり、汚れを落とす。花立ての中だって忘れちゃいけない。香炉もぐるりと撫でて磨き上げる。

軍手が黒ずむ度、バケツに汲んであった井戸水で洗う。何回洗ったのだろう。あんなに澄んでいた水が真っ黒だ。それに比例して元の輝きを取り戻していく石たち。

最後の難関である灯籠にもそのまま取り掛かる。休憩を挟むとやる気がなくなってし

もうからだ。

灯籠の脚も洗い終わり、やっと石磨きは終了。本来の黒々とした姿で佇んでいる。

これでおしまい——ではない。仕上げに、物置台周りの玉砂利洗いが残っている。

ざるに玉砂利を入れて、汲みなおしたバケツの水で洗う。汚れていないように見えて、砂埃にまみれているのだ。墓石ほど目に見えて水は黒くならないが、確実に汚れが落ちている。その証拠に、底に砂がたまっているではないか。

永遠とも思えるこの作業にも終わりはくるもので。すべて綺麗に洗い上げた。水にぬれた玉砂利は宝石と見紛う程。乾いてもその美しさは衰えない。

ダメ押しに通路を箒で軽く掃き、やっと、やっと墓掃除の終了だ。心なしか、通る風も心地良いものになっている。

新しく花を供えた墓の前に座り、持って来ていた缶ビールをあける。もう一つは墓前に。飲めないのは残念だが、こういうのは気持ちの問題だ。

「どうかな。結構頑張ったけど。おじいちゃん綺麗好きだったから、これで満足するかな。」

辺りを見渡し、墓石に語りかける。

欲を言えば墓誌に掘られた文字の溝を拭いてほしいところだが…及第点はやるか。

しばらく座り込み、やがて体力が回復したのか、尻についた砂を払って立ち上がる。

「じゃあ、また来年。」

ああ、また来年。

気付けば、空は茜色。

来るたび大きくなる孫の背中を見送って、今から来年の墓掃除を楽しみに思うのであった。